滋賀短期大学研究紀要
第 47 号 Vol.2 2021 年度

新型コロナウイルス感染禍における
子どもの主体性を大切にした家庭と園の連続性―考察

三上　佳子*
滋賀短期大学 幼児教育保育学科

In the new coronavirus infection
Continuity between family and garden that values children's independence-Consideration

Yoshiko　MIKAMI*
Department of Early Childhood Care and Education , Shiga Junior College

抄録 : 乳幼児や保護者を取り巻く状況は，新型コロナウイルス感染症の世界的なパンデミックによって大きく変化し，乳幼児や保護者にも大きな心理的影響を与えている。感染禍の中，着目したのは，本学附属幼稚園が昨年休園時から夏季休業期間中に実施した「チャレンジ 40」であった。休園時，家庭でできる遊びを紹介した事例が多い中，子どもの主体性を大切にした取り組みは, 家庭と園の連携向上につながる示唆を得ることができると考える。また今後の中，長期的感染症対応の中で，子どもの主体性を大切にした家庭と園の連続性を意識した取り組みにおける新しい知見は, 家庭と園が子どもの育ちを共有し連携していく一助になるとともに, 子どもが困難な状況時や新しい出来事に対して，「自分で考え，解決する力」にもつながっていくことが期待できる。

キーワード : 新型コロナウイルス感染症の世界的な流行(パンデミック)，子どもの主体性を大切にした保育，家庭と園の連続性，自分で考え解決する力

1. はじめに

乳幼児や保護者を取り巻く状況は，新型コロナウイルス感染症の世界的な流行(パンデミック)によって大きく変化し，情報による社会的不安・混乱や隔離・行動制限がもたらすストレスを引

* E-mail: y-mikami@sumire.ac.jp

き起こし，乳幼児や保護者にも大きな心理的影響を与えている。近澤[1)]は新型コロナウイルス感染症が乳幼児に与える影響として，感染予防対策・日常生活・友達との関係・家族との関係・メンタルヘルスがあげられると述べている。また新型コロナウイルス感染症の影響で，乳幼児や親はともにストレスを抱えており，他者とのつながりが失われ孤立化する家庭があったと報告している一方，家庭で過ごす時間が増え，家庭関係を見直すきっかけになったとも述べている。

文部科学省[2)]では，新型コロナウイルス感染症への対応として，各園が「遊びの贈り物」を家庭に郵送したり，「保育動画の配信」や「園ホームページを使った情報配信」「絵本貸出し」「園庭開放」「給食の提供」などをしたりするなど，子どもが家庭でも楽しみ，満足感や充実感を味わえる支援や園が再開した時に円滑に園での生活になじめるようにする支援について具体的な取り組みを紹介している。

世界においても，政府主導で乳幼児教育の場を閉鎖する動きの中，さまざまな取り組みが見られた。特に注目したのが優れた乳幼児教育の実践として，世界中から注目されているイタリアのレッジョ・エミリア市である。森[3)]は，レッジョ・エミリア市が，街ぐるみ(コミュニティ)で子どもを育てることを柱にして参加・対話・連帯を重視し，新型コロナウイルス感染症への対応として「家で一緒に遊ぼう」「音のなぞなぞ」「家でレッジョ・アプローチ―木は家族」の活動を紹介している。そして森は今後，子どもの権利を保障し，子どもと大人が当事者として乳幼児教育保育に参加し対話し，連帯する実践を，コロナ過に限らず日常の営みとして展開する可能性と潜在性について，レッジョ・エミリア市の働きと対話しつつ，日本独自のあり方を探り検討していきたいと述べている。

新型コロナウイルス感染症禍の中，日常の新しい生活の営みとして展開していくためには，日本の幼児教育・保育が大切にしてきた「子どもの主体性」を意識した取り組みが求められていると考える。神長[4)]は「主体的に」ということは，幼児なりの興味・関心，あるいは願いや期待など，内的な動機をもって物事に取り組む姿勢であると捉えている。主体的な取り組みを促すために，環境から刺激を受けながら，幼児が本来持つ能動性を発揮することが大切である。そのことにより，幼児はつぎつぎと新たな世界に気付き，『自分もやってみたい』と期待をもって，主体的に取り組むようになると述べている。休園中，各園が家庭でできる遊びを紹介

した事例が多い中，本稿が着目したのは，本学附属幼稚園が 2020 年度，休園時から夏季休業期間に，子どもが自分の好きなことを 40 日間チャレンジした「チャレンジ 40」であった。

「チャレンジ 40」は，子どもの主体性を大切にした育ちの保障や，保護者の幼児期の教育に関する理解を促し，家庭と園の連携向上につながることを目的としている。

本稿では「チャレンジ 40」を通して，家庭と園が子どもの育ちを共有し主体性を尊重していくことは，感染禍の中，子どもが困難な状況時や新しい出来事に対して「自分で考え，解決する力」の育ちにもつながっていくと考えた。

２．方法

調査は，2020 年度，本学附属幼稚園 5 歳児保護者 46 名および 5 歳児担任 2 名を対象に，感染禍で実施した「チャレンジ 40」の振り返りアンケートを実施した。(本学紀要 46 号[5] に掲載)(回収率 86%)

2021 年度には，本学附属幼稚園 4.5 歳児保護者 89 名および保育者 10 名を対象に，「チャレンジ 40」後の子どもの育ちや感染禍における家庭や園の取り組みおよび困ったこと・ストレスに感じていることについてアンケートを実施した。(回収率 60%)期間は，2020 年・2021 年ともに 10 月下旬から 11 月中旬であった。

2 つのアンケートをもとに新型コロナウィルス感染禍における子どもの主体性を大切にした家庭と園の連続性について考察する。

３．滋賀短期大学附属幼稚園の取り組み(2020 年度) 本学紀要 46 号[5]

3.1 子どもの主体性を大切にした家庭における「チャレンジ 40」を振り返って(アンケート)

本学紀要 46 号[5] に掲載した「チャレンジ」について紹介する。

本学附属幼稚園では，新型コロナウイルス感染禍及び創立 40 周年の取り組みとして，休園時から夏季休業期間中に「チャレンジ 40」を実施した。「チャレンジ 40」は，子どもが自分の得意なことやチャレンジしたいことを決め，家庭の協力も得ながら 40 日間取り組むものであった(参考資料 4)。

「チャレンジ 40」では，5 歳児が毎日女の子を描き続けたり(資料 1)，縄跳び前跳び連続 40 に挑戦したり，4 歳児が 40 枚の好きな絵を描いたりした(資料 2)。
園が始まっても，空き箱でつくった「ギター」を家庭から持ってきて，「園で続きを作る」と話す姿や，園庭で縄跳びを披露す

る姿など，子どもの主体的な活動は，今まで以上に家庭と園の連続性の中で培われ，家庭と園が子どもの育ちを共有していく機会にもなった。また保育者や保護者が，子どもの素朴な表現からそこに込められた思いを受け止め共感したり，挑戦する姿を応援し，共に喜んだりした。
子どもは，保育者や保護者や子ども同士の関わりによって，自分でできた満足感や充実感を味わったと考えられる。

資料 1 40 日間 5 歳児おしゃれな女の子を描く

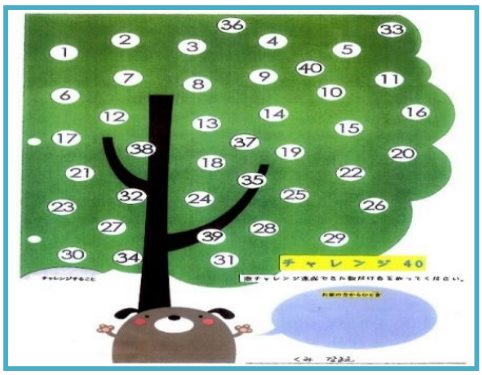
資料 2 好きな絵を描く

2020 年度は，本学附属幼稚園の 5 歳児 2 クラスの保護者に，新型コロナウイルス感染禍における休業中の家庭での子どもの表現が素敵と感じたことがあるか』のの造形表現について焦点化し，保護者アンケートを実施した。

アンケートでは①『家庭で描いたり作ったりしているか』の問いに対して「はい」が 85.7%，「ときどき」が 8.6%，「あまり」が 5.7%であった。また「はい」「ときどき」と答えた人で『どのような遊具や材料で描いたり作ったりしているか』の問いに対して，身近な材料や紙で作ったり描いたりすることを楽しむ姿が多く寄せられた。また既成の遊具においても，自分で考えて作れるブロック・レゴ・ラキュー・ビーズなどが人気であった。
②『身近な材料で作ったり，紙に絵を描いたり，折り紙をしているのをみて，子どもの表現が素敵と感じたことがあるか」の問いでは，「はい」が 91.4%，「ときどき」8.6%，「あまり」は 0%であった。
③『どのような表現をした時，子どもの表現が素敵と思ったか』の問いでは，「その子らしさの表現や工夫」「作ったものに心を寄せている時」「見立て・創造力の豊かさを感じた時」があげられていた。家庭と園は，子どもの造形表現を介して「子どもの豊かな表現の世界」を共有する機会にもなっていた。
④『子どもたちが家庭で描いたり作ったりしたものを園に持っていったり，園か

ら持って帰って描いたり作ったりしているのを見て感じたことや願っていること』については,「家庭と園の相互で見てほしいという気持ちや意欲が家庭と園の連続性を生んでいる。」「造形表現を介して友達と互いに影響し合える関係性を育んでいる。」「自分で感じたことや考えたことが自分なりの表現につながっている。」という意見があった。保護者は，「チャレンジ 40」の取り組みを通じて，家庭と園の連続性や子どもの育ちを実感していると考えられる。

参考資料4　附属幼稚園における「チャレンジ 40」



3.2　子どもの主体性を大切にした家庭における「チャレンジ 40」と園の連続性

本学紀要 46 号[5] に掲載した「チャレンジ 40」と園の連続性を紹介する。

事例 1　5 歳 7 月（モモ，ミツキ，ナオ）

身近な材料で描いたり作ったりする

事例 1　「作って何しようかな?」「素敵な女の子ができた」

8 月，モモとミツキは，登園してくると空き箱や広告紙などでプリキュアの変身グッズを作り始める。モモは広告で作ったスティックを動かしてみる。ミツキは空き箱でポシェットを作り，開け閉めができるように工夫して作っている。変身グッズができると互いに顔を合わせ，保育室から出る。プリキュアに変身して園舎を駆け回り遊んでいた。朝の会が始まる時間になると作ったものを補強したりしながら「明日，お休みなの（家の用事で休むようである）持って帰って遊ぼうね」と話をしていた。

同じテーブルには，ナオが紙で女の子を作っていた。掌に乗せられるほどの大きさの女の子を集中して作っている。モモやミツキと会話はないが，女の子に合わせた服を作っている。出来上がると，しばらく作った女の子をみて，丁寧に自分のお道具箱にしまった。お道具箱には，ナオが作ったいろいろな女の子たちが入っていた。

図 1 制作の場面より

登園直後の遊びは，子ども達にとって昨日の遊びや家庭での生活や遊びに連動していることがある。モモとミツキは気の合う友達であり，互いにプリキュアという共通のイメージで，自分なりにスティックやポシェットを制作し遊んでいた。作ったもので遊ぶ，遊んだものを家でも使うというサイクルは，作ったものへの愛着や誰かに見せたい，作ったものよくしたいなどの意欲にもつながっていると考えられる。また紙でいろいろな女の子を作り，道具箱に入れたナオも，作った女の子を自分で選んで家に持って帰っているとのことであった。ナオにとって作った女の子は，家庭と園で遊ぶ友達であり，ナオ自身の遊びへの思いをつなげている存在なのかもしれない。保育者は，子ども達が作ったものを園の遊びに使ったり，作ったものを持って帰り家庭でも遊んでいる姿を知ることで，その子の表現が園だけで完結していない場合もあることを理解する必要があると感じた。そして園の環境に家庭にもある空き箱や広告紙など身近な材料を意図的に置いておくことによって，子どもの主体的な表現は，家庭と園の連続性の中で，より豊かになっていくことが見えてきた。

４．滋賀短期大学附属幼稚園の取り組み(2021 年度)

4.1　感染禍に実施した「チャレンジ 40」後の家庭の子どもの様子や感染禍における家庭の取り組み

今年度，本学附属幼稚園の 4 歳児 1 クラス 5 歳児 2 クラスの保護者を対象に，昨年度「チャレンジ 40」に取り組んだその後の子ども達の様子や，感染禍の中，家庭で取り組んだ対応や困っていることについて，記述式のアンケートを実施した(表 1 表 2)。

表 1 感染禍の中取り組んだ『チャレンジ 40』後の家庭と園の連続性について』保護者アンケート

① 昨年、「チャレンジ 40」を家庭で取り組まれましたか

はい　いいえ　　はいと答えた方はどのような内容であったかお知らせください。

例・・ブロックで〇を作る、空き箱で〇を作る。折り紙で〇をつくる。紙に絵を描いたりする。

② 「チャレンジ 40」の取り組み後のお子様の家庭や園での様子で変化はありましたか?

はい　いいえ　　はいと答えた方はどのような様子でしたか?

例・・自分から～をするようになった。園の遊びを伝えるようになった。自で～を考えたり、挑戦したりした。

③ 感染症対応を、家庭でも取り組んでおられますか?

はい　いいえ　　はいと答えた方は具体的な取り組みを教えてください。

例・・自分から～をするようになった。園の遊びを伝えるようになった。自で～を考えたり、挑戦したりした。

④ 感染症禍の中で、困っていること、ストレスと感じていることについてお教えください。

ご協力ありがとうございました。

表 2　チャレンジ後の子ども達の様子

保護者アンケートより

チャレンジ40で取り組んだ内容(上位3)	
1	好きな絵を描いたり，ものを作ったりする。
2	絵本を自分で読む。
3	自分で決めた手伝いをする。
他	・家の壁にあるボルダリングに高く登る。 ・自転車に乗れるようになる。　・折り紙で40の花束を作る。

チャレンジ40後の子ども達の様子
・絵本を読むことが楽しくなり，弟にも読んだりしている。
・作ることに挑戦後，折り紙で自分で折り方を考えたり，たくさん折って家族にプレゼントしてくれるようになった。
・手伝いで自信をもったのか，自分から手伝うことを尋ねたり，他の手伝いを自分で考えてするようになった。
・努力する事，継続することで，自分でできなかったことができるとわかったのか，やったことのない事に挑戦するようになった。
・好きな絵日記を書くことで，親子でその日のことを話したりするようになった。
・好きなことを続けたので，継続して何かをする機会が増えた。

「チャレンジ 40」後，園では「チャレンジ 40」の取り組みを紹介するとともに，子ども達が家庭での挑戦をしたことや，作ったものを披露する機会を園の中で継続して行った。そのことが今回のアンケートにも反映されており，表 2 の記述のように，子ども達が自分で進んでしたことや好きなことを続けたことが自信となり，自分なりに考えたり，自分から行動したりする姿につながっていると考えた。

4.2　感染禍に実施した「チャレンジ 40」後の園の子どもの様子や感染禍における園の取り組み

本学附属幼稚園の保育者を対象に，昨年度「チャレンジ 40」に取り組んだその後の子ども達の園を実施した(表 3 表 4)。

表 3　感染禍の中取り組んだ『チャレンジ 40』後の家庭と園の連続性について』教職員アンケート

① 昨年、「チャレンジ 40」で印象に残った家庭での取り組みはありましたか?

はい　いいえ　　はいと答えた方はどのような内容であったかお知らせください。

例・・ブロックで〇を作る、空き箱で〇を作る。折り紙で〇をつくる。紙に絵を描いたりする。

②「チャレンジ 40」の取り組み後の園での様子で変化はありましたか?

はい　いいえ　　はいと答えた方はどのような様子でしたか?

例・・自分から～をするようになった。園の遊びを伝えるようになった。自で～を考えたり、挑戦したりした。

③ 感染症対応を園で取り組んでおられますか?園で取り組んでおられることを教えてください。

はい　いいえ　　はいと答えた方は具体的な取り組みを教えてください。

例・・自分から～をするようになった。園の遊びを伝えるようになった。自で～を考えたり、挑戦したりした。

④ 感染症禍の中で、困っていること、ストレスと感じていることについてお教えください。

ご協力ありがとうございました。

表 4　チャレンジ後の子ども達の様子

保育者アンケートより

チャレンジ40で印象に残った取り組み抜粋
・毎日，絵を描く。40枚を綴って絵本のようにし，保護者が1枚1枚，何の絵を描いたか等のコメントを記載していた。
・毎日，子どもが絵を描いて絵日記のように綴っていた。家庭での40日間の生活がよくわかった。保護者との会話も広がった。
・好きな人を40人描いていた。一人一人違っていて，その子の思いが伝わってきた。
・写真を添えて，1回1回の取り組みの充実しているのがよくわかった。

チャレンジ40後の子ども達の様子
・今年度，空き箱や身近な材料を家庭で作って持って来る子どもが多くなった。
・園で作ったものを家庭に持って帰って，保護者に見せたり遊んだり姿が見られた。
・チャレンジ40をきっかけに，縄跳びなど一人一人のチャレンジを園で紹介する場を設けた。そのことが認めてもらえたという自信につながったと感じた。
・友達がはじめた絵日記を園で紹介したことをきっかけに，他の子も絵日記を描く姿が見られた。

保育者のアンケートでは「チャレンジ40」後，家庭で作ったものを園に持ってくる子ども達が増えたり，園で作ったものを持って帰り家庭で遊ぶ姿も見られ，保護者と会話が広がったと記述している。子どもの主体性を大切にした取り組みは，家庭と園が子どもの育ちを共有していくきっかけにもなったとともに，保育者にとっても，子どもの主体的な活動が，家庭と園の連続性によってよりひろがっていくことを学ぶ機会となったと考えられる。また周りの子ども達も友達の「チャレンジ」に刺激され，園と家庭で挑戦する姿は子ども同士の育ち合いにもつながっていくと考えた。

4.3　新型コロナウィルス感染禍における家庭と園の取り組み及び困っていることの実態

保護者・保育者アンケートより　(表 5)

表 5

感染禍に子ども達が定着してきたこと進んで取り組んだこと	
保護者アンケートより	
手洗い・うがい	87%
消毒(外出時の携帯消毒含)	31%
マスク(外出含)	38%
その他(顔を触らない，着替える，外出控える等)	
保育者アンケートより	
消毒(保育室・遊具等の消毒含)	75%
パーテーションの設置　換気	88%
手洗い・うがい	88%
マスクの指導	63%
その他(食事は静かに食べる，体力づくり，昼食時の席を記録，密を避ける等)	

感染禍で困っていること，ストレスに感じていること	
保護者アンケートより	
戸外に出かける機会が減る。(体験不足)	79%
マスクによる課題。(表情がわからない，鼻呼吸ができにくい等)	77%
友達と一緒に遊ぶ機会が少なくなった。	27%
その他(運動不足による体力の低下，祖父母に会えない，感染予防の限界等)	
保育者アンケートより	
マスクによる課題。(表情がわからない等)	38%
楽しく会話をしながら食事ができない。	38%
その他(行事の精選，消毒にかかる時間等)	

感染禍に，家庭や園がともに積極的に取り組んできた「手洗いやうがい」「消毒」は子ども達に定着し，自主的にしている記述が多かった。

家庭や園ともに課題としてあがっていたのは，「マスクにより表情が読み取れない」であった。

保護者の中には，「家庭で友達と一緒に遊ぶ機会が少なくなった」の記述があり，園も，「友達と会話をしたりして食事をする楽しさがなくなった」があり，双方とも，友達との関わりやコミュニケーションへの心配があげられていた。

4.4　感染禍の中，新しい生活の構築につながる子どもの「自分で考え、解決する力」

感染禍の中，今回のアンケートで家庭と園の取り組みで定着してきたことや，困っている・ストレスを感じている実態が見えてきた。子どもが困難なことなどいろいろなことに乗り越えていくためには，日々の家庭と園の連続性の中で「自分で考え，解決する力」が求められている。「チャレンジ 40」後の A 児の成長を紹介する。

4 歳児のときに「チャレンジ 40」で好きな絵を 40 枚書くことにチャレンジした A 児がいた。担任に話を聞くと「A 児は 4 歳児当初は泣くなど不安定な姿や我を通そうとしてぶつかる姿が見られた。40 枚の好きな絵を描いたことが自信になったのか，安定して過ごしたり，友達の気持ちを受け入れ，一緒に遊ぶ姿があった。また，保育者は「5 歳児のとき，A 児が運動会のかけっこでこけてしまった。そのとき，A 児は最後まで走り切り，成長を感じた。」と話されていた。

見ら主体的にはじめた取り組みの達成感は，園だけでなく家庭と連続した中で培われ，子どもの自信につながった。

資料 2 好きな絵を描く　再掲

そしていろいろな人に認められた喜びは，困難な状況になったとき，自分で乗り越えたり，相手の気持ちを受け入れるなど柔軟に対応する育ちにつながっていった。主体性の概念を検討した山本[6]は，幼稚園教育要領解説[7]を踏まえ子どもの主体性を育むことは，自ら学び，考える力が育まれることであると述べている。また鯨岡[8]は，「主体」という概念について『私』として生きる面と『私たち』として生きる面の両面のバランスをもって発揮する姿を指して用いるべきであると主体性について説明している。本学附属幼稚園の子どもの主体性を大切にした取り組みは，家庭や園で受け止め，認めてくれる人々との関係性の中で，「自分で考え，解決する力」の育ちの一助になったことが見えてきた。

５．おわりに

本学附属幼稚園の子どもの主体性を大切にした取り組みは，子どもの育ちの保障や保護者の幼児期の教育に関する理解につながり，家庭と園生活の連携向上の一助になった。また子どもが「チャレンジ40」で体験した自信は，家庭と園の連続性や周りの人々との関係性の中で育まれ，子どもが困難な状況時や新しい出来事に対して「自分で考え，解決する力」につながっていったと考えられる。

今後，中長期的感染症対応やニューノーマルの生活に対応できる子どもの主体性で培われる「自分で考え，解決する力」等について，実践から考察を深めていきたい。また感染禍の中で課題として挙げられている子ども同士のコミュニケーションが広がる環境や，マスク着用時の表情の読み取りや豊かな表現を引き出す手立てについても再考していきたい。

謝辞

本研究を遂行するにあたって，本大学の附属幼稚園小野清司園長をはじめ教職員の皆様，そして 4 歳児 5 歳児の保護者の皆様に協力をいただいたことに，深く御礼申し上げる。

文献

1） 近藤幸，竹明美，佐々木綾子編「新型コロナウイルス感染症が乳幼児と親に与える影響に関する文献検討」(2021) 大阪医科大学看護研究雑誌 第 11 巻 p87

2） 文部科学省「新型コロナウイルス感染症への対応のための幼稚園などの取組事例集」(2020)

3） 森　眞理　編「コロナ過におけるイタリアのレッジョ・エミリア市の乳幼児教育が示唆すること～参加・対話・連帯に着目して～」(2020) 神戸親和女子大学国際教育研究センター紀要 第 6 号 pp6-10

4） 神長美津子編著「計画的な環境の構成－幼児の主体性と保育の展開」チャイルド社(2000)　pp10-11

5） 三上佳子編「感じたこと考えたことを自分なりに表現する生成過程における家庭と園との連続性―考察－身近な材料で描いたり、作ったりする造形表現を通して－」(2021)　滋賀短期大学紀要第 46 号 pp15-22

6） 山本　敦子編「現行の幼稚園教育要領における子どもの主体的な活動の要素の検討」(2002)大阪キリスト教短期大学紀要第 55 号 p39

7) 文部科学省「幼稚園教育要領解説」(2018)

8) 鯨岡　峻「保育・主体としての営み」(2010) ミネルヴァ書房 p13

＊この研究は滋賀短期大学研究倫理委員会の審査を受け了承済です。